

わが繪わの歌

中山忠道

302

283

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5

始

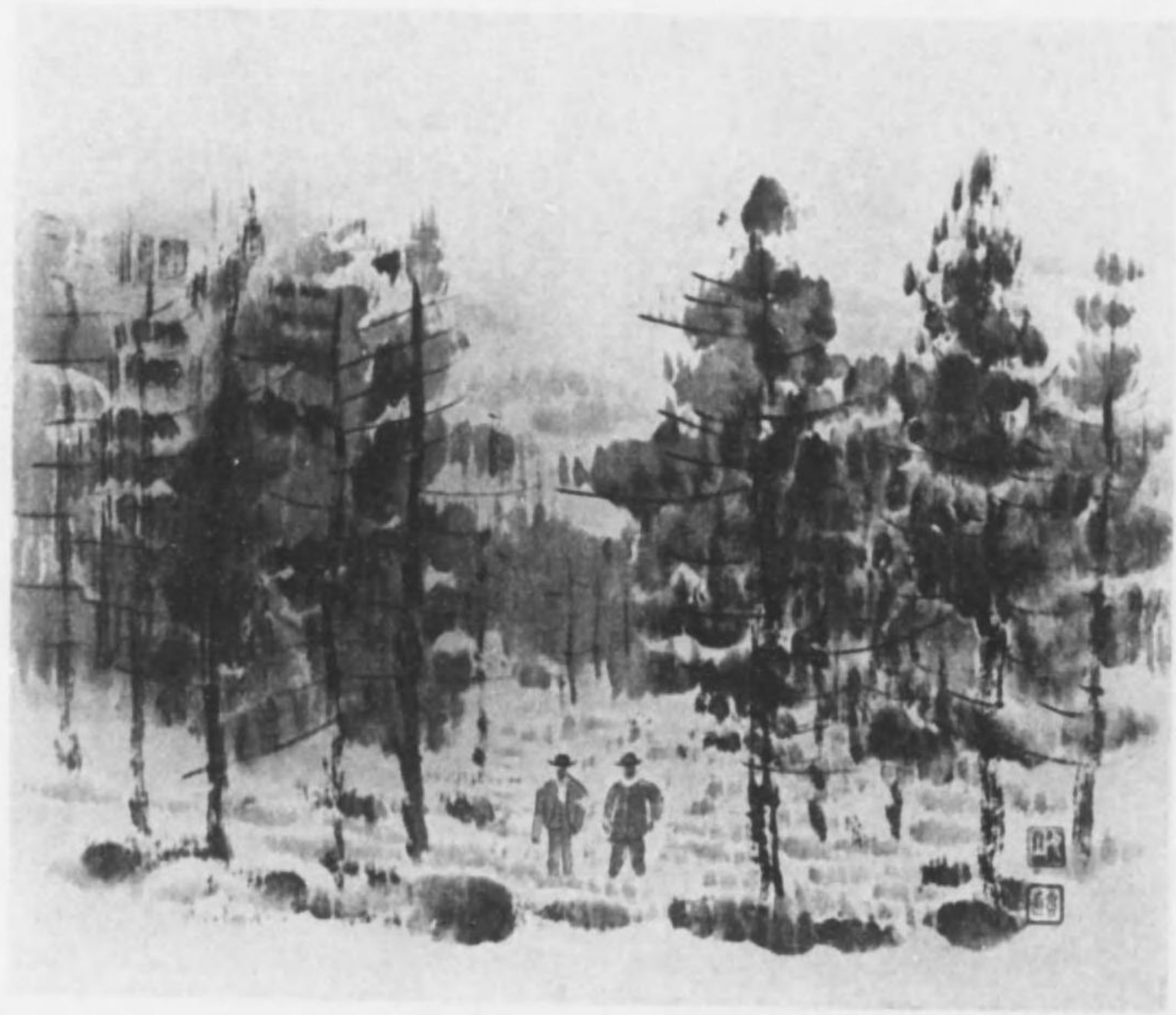






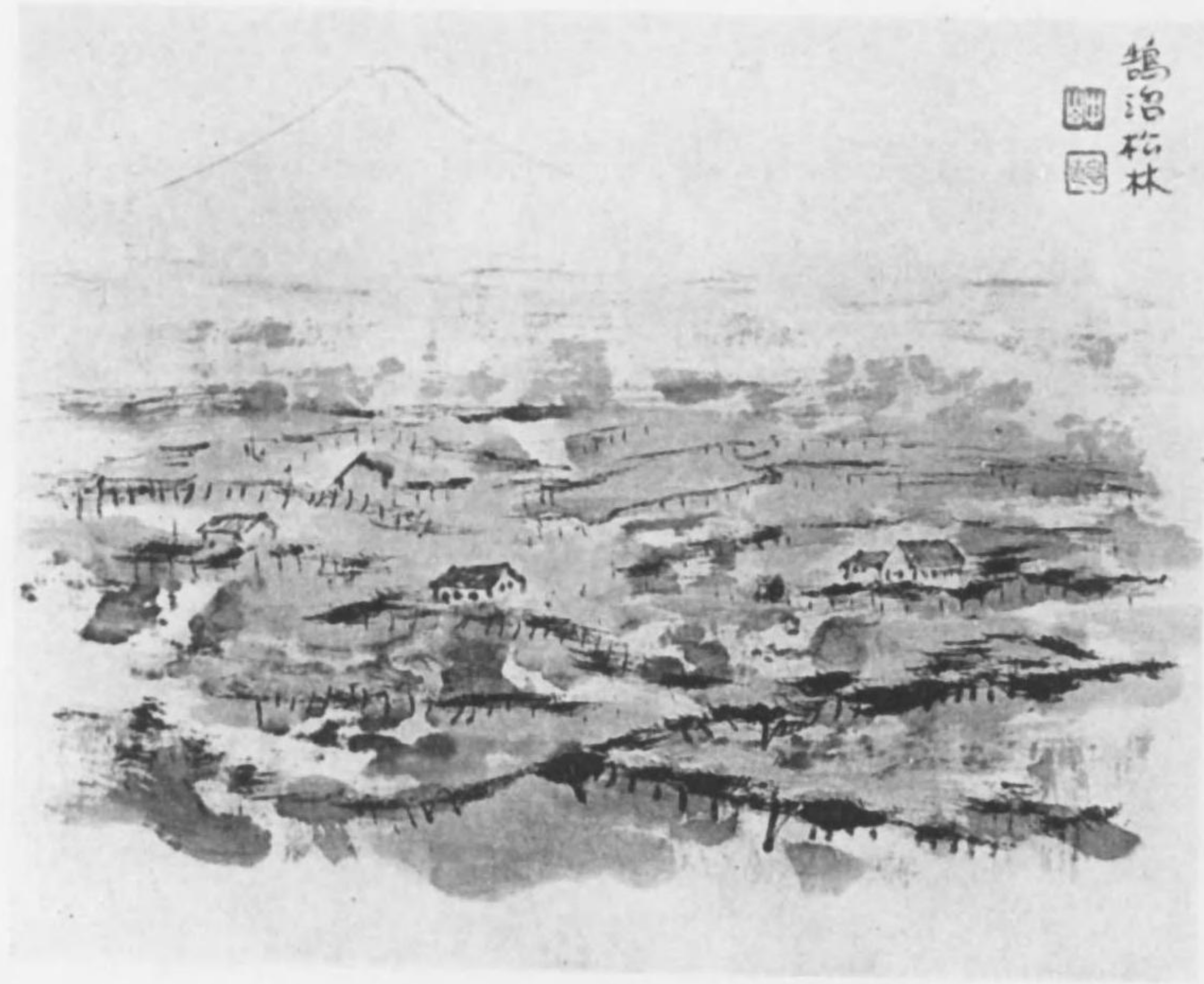
和
の
繪
巾
が
歌





松岡洋右氏藏

落葉松の森



南 弘 氏 藏



藏氏吉春位下

にしたのである。妻としては、余の繪が散失するのを惜しんで、子供達のために、せめて畫集に残して置いてほしいと、日頃から望んでゐた折でもあつたのだ。かくて、この非常時にふきはしからぬ、有らすがなの有閑書が生れたが、これこそ實は、非常時を憂ひての愛國の筆禍から生れた、廢物利用の書である。

馱畫の辯

余の繪は、野澤如洋といふ無名の天才の、筆意のほんの一端を真似て見たに過ぎない。如洋は我が繪畫史上に、空前な畫聖と敬はるべき實力を持ちながら、全く人に知られなかつた。余は川端龍子と並べて尊敬してゐたが、龍子は誰も知る如く畫壇の第一人者として、華かな人氣の絶頂にあるに反し、如洋は殆んど世間に知られず、余等の後援で、漸く世間的になりかゝると共に、惜しくも倒れてしまつた。

偶然の機會から、余はこの老畫家を知り、その孤獨落魄な晩年を慰むるため、一友と計つて『如洋畫集』を編み、二卷を生前に、第三卷を死後に作り、それを全國の府縣立その他の重要圖書館に寄附して置いた。彼の繪と人とを後世に傳へる友情からである。然し第一卷を出すと、早くも反響が大きく、秩父宮殿下を始め、他の宮様方の破格な知遇に浴し、翁の晩年は愉快そのものであつた。

余は若い頃から、畫法に一つの夢があつた。それは自然の印象を、そのまゝ胸に

發表もしなかつた。句集など作らうとも思はぬが、左に見本を少し掲げて置く。

すすき原

すすき淋しく暮れて行く

蕨、蕨

おゝ春になつた山

障子にうつる枝の影

—— おや鳥が来たぞ

夕焼、小焼

柿の實もまつ赤だ

壺の中の暗さよ

古い昔の匂ひよ



井頭ノ公園

井頭池
印

井頭ノ公園

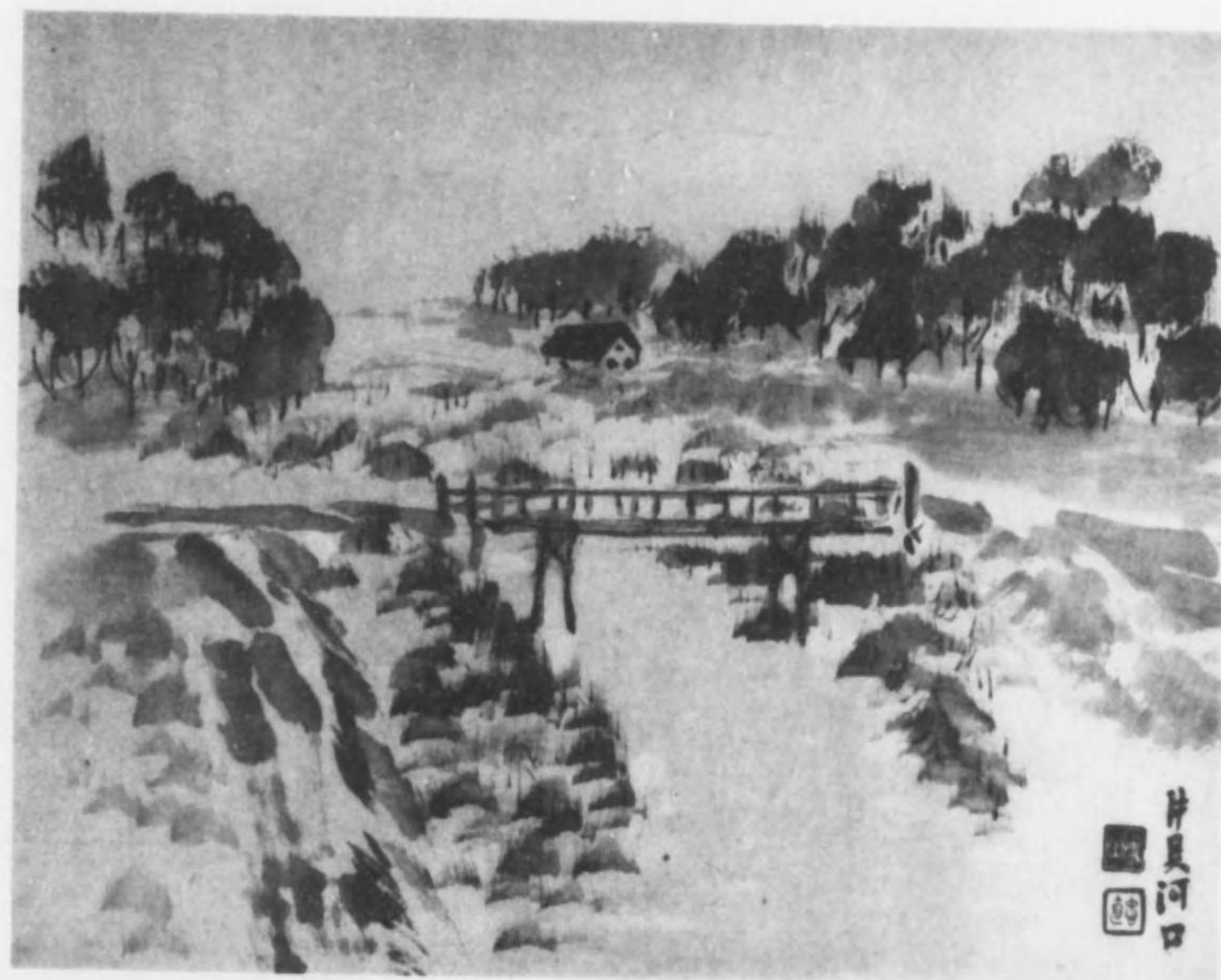


輕井澤





舊
作



これは大正元年から大正十三年までの作で、やつとこれだけ集め得た。大正十四年から昭和十四年の七月までの歌は残つてゐない。——この時代の作は、月夜の散歩に、闇の彼方へ山彦の如く消えさせ、また酒席での即興は煙草のけむりの如く散らせてしまつた。

溪流

崖たかく木はこんもりと繁み生ひ
小暗く淵に影をうつせり

暗き崖の森の繁みに鳥ひそみ
木の實を淵にしきりに落す

木洩れ陽はつめたく淵を照しるて
蝸の聲しづかなるかな

淵の岩の冷たき上に蝸を
聞きつつ絲を垂れてゐたりき

谷の岩の冷たき上に坐りゐて
何時しか我も岩の心地す

屏風岩を離れて水は急に立ち騒ぎ
岩をゆるがす早瀬とかはる

瀬をみて居れば岩は川上へのぼる如し
わが立てる岩危くゆるる

川波の沫にぬれて光りたる
岩を飛びつつ谷間をゆけり

岩を傳ひ谷をまはれば太々と
橡の古きの並びて茂る

橡の谷のまなかに凄き瀧水の
谷風おこしどよもし落つる

轟き落つる瀧壺の近く紫陽花の
濡れて咲きたる淋しかりけり

岩疊ほとばしる瀧を見あぐれば
峽空たかく白雲うごけり

峯に立てば峽の木の間を透きてひくく
しづかに碧き湖の見ゆかも

木の間より白きヨットの動く見ゆ
湖の碧さの深くも深し

から松林

— 北原白秋の「落葉松」の詩に暗合、微笑にたへず —

信濃なる淺間の山に立つ煙
けさは東に流れ静けし

から松の林に入りてから松を
しみじみと見る淋しかりけり

さびしとも寂しかりけりから松の
林のなかに落葉を浴ぶる

しみじみとから松の葉を身に浴びて
つぐみの聲を聞きてゐたりき

から松の谷にまろびて淺間嶺の
煙をみれば淋しくも淋し

から松林のすすきの叢むらに一もとの
紅葉まぢれるさみしかりけり

木洩もれ陽ひはつめたかりけり松原の
すすきの花もかぼそかりけり

から松の林の奥に湧く泉いづみ
熔岩をもれて澄みるたりけり

熔岩と落葉をくぐり落つる水
静けき音に冬の近しも

淺間嶺^かは雲かぐろひて來りけり
そゞろに秋の冷^{ひえ}は身にしむ

×

白樺のつめたき肌によりそひて
いつしかわれも木となるごとし

×

淋しさに野邊に來りて樹をゆれど
樹をゆすれども葉さへも散らす

——これ十九才作、匿名で雑誌に投書、一等に當選、窪田空穂氏の
選であつた。この歌は友人の小説に引かれてゐる。——

月夜

秋高し月をしみじみ眺めんと
芦間の水路^{みち}に舟を下せり

芦の葉はわが舟べりにすれすれて
さらさらと鳴るは淋しかりけり

肌さむき風にそよめき芦の穂の
月の光に白くも白し

何といふ淋しきぞ深き淋しきぞ
月夜にそよめく芦の穂の波

舟はゆらゆら芦の穂岸を離れ行き
しづかに廣き湖心に浮ぶ

ひろびろと湖のまなかに舟を放ち
銀色の波に心を流す

月の光は水に似たればこのわれも
水底の魚に似たる心地す

芦の穂かはた魚なるか風なるか
水と空ともわかぬ心よ

舟底に月を仰ぎて臥しをれば
われは李白やハイネに似たり

月光賦

山の背を月を浴びつつのぼり行く
この尾根は天にのぼる道にや

露にぬれて月に光れる尾根の岩
はてなく天に連ることし

一歩づつ天にのぼり行く心地して
踏みしむる尾根の風の寒しも

天と山の相ひ寄るところ際なし
月の光にぼかされてあり

ひさかたの光のなかにたたずめば
わが衣までたゆたふ光

ゆたかなる月の光の降る峯に
月の光を吸ひ吐きてあり

ゆたかなる月の光を吸ひ吐きて
心は天にとけ入りにけり

月とわれとわれと月とのけちめなし
一つの空を吸ひ吐きてあり

雲きたり岩を包みてめぐりけり
わが足は雲に立てることしも

雲の海はてなくひろく銀色に
月の光りに照り冴えてあり

雲うごけばこの身も雲を行くごとし
銀の浄土の寂光に立つ

温泉にて

温泉の庭に柿の静かに咲くを見て
誰れまつとなく人の待たるる

湯にひたりうつとり空をながめゆる
ひとみに揺るる夏のみどり葉

揺るとなく夏のみどり葉ゆれてゐて
ながるる湯の音かすかなるかな

目を閉ちて湯ぶねにちつとひたりをれば
われと我が身の忘れにけり

草刈り

われは草を刈るひねもす原に草を刈る
わが振る鎌の音のさびしさ

丘の上まで傾斜のゆるき草の原
刈りつつしづかにのぼり行くかな

午後の陽をあびて鎌ふるわが汗は
尊とかりけり一心に刈る

草原に腰をおろして鎌とげば
虫は静かに鳴きてゐるかな

乞食禮讃

はるかなる空の彼方に浮く雲に
思ひを寄せて若草に臥す

このままに雲のごとくにあてどなき
旅に出でんか草に起き伏し

若草よ春の光よそよ風よ
さすらひの身にしくものぞなき

あてどなき旅より旅にさすらひて
さんらんと光る乞食にならん

さんらんと光る乞食にましますと
われとわが身をおろがみまつる

み乞食はさんらんとして臥したまふ
冬あたたかし枯草の上

み乞食はさんらんとして坐ります
夏も涼しき橋の下風

み乞食はさんらんとして行きたまふ
天上天下唯我獨尊

成功だ名譽だ富だ権力だ
さて人生は賑かなこと

古人今人一を貫く



序

本集の歌は大正十三年の作全般
 「わが糖わか歌」を出さんとするに当り
 俄かに舊歌に新書を添ふ。全
 回一日にしてなる。この日街頭は防
 空演習に喧噪自ら省みてこの
 閑日月に微笑す

昭和十四年秋十月廿八日



田子の浦に今も雪あり 忠直



田子の浦やうちいで見れば道真白にぞ
 不の高山麓に今も雪あり 忠直

佛本米是乞食



鎌倉かみ佛なれど大佛は
乞食におはす夏木之かた忠道



此系陽花や家傳の菓いさか家
二の(000)ハハこの花を植中 忠道



疎狂不弄屈權門
書叙風塵是野分
經世濟民思識否
廟堂以外策猶存
以晴人志畫圖

歌聖牧水酒造同行圖



幾山河君耕え行は淋いさの
果マをむ國や君は旅行く忠直

北原白秋散之圖



大鴉一羽渚に晝深しそ水
眺めマトシカジヨシあり 忠直

新
作



『我が日本學』の發賣禁止を機に、沼津の若山牧木の舊居を求めて隠棲することにし、下見をして歸ると、その晩にもう行き住んだ氣持になり、一夜の中にこの新作百二十首が生れた。沼津に行かぬ前に、こんな歌が生れるところに詩人の空想がある。古人はうまいことを云ふた——歌人は居ながらにして名所を知ると、まさにこの歌の類である。

母なほ健在

夢にさへ母を亡くして泣くものを
まこと失せなばいかに悲しき

人の世に容れられざりし暴れ兒も
ただ母ゆへに墮ざりし我

わが年は五十路に近くなりぬれど
悦しきものは母のすこやか

いつまでも健かにませと朝飯の
湯氣の立つごと祈りまるらす

朝餉の湯氣を母に捧ぐるうれしけれ
佛壇の香に幾まさりたる

わが母は生神にませば朝飯の
温かき湯氣を香としまゐる

母の脊にわれ負ぶさりて星を見て
天の不思議を感じそめにき

プレヤ星團の間に困りてわが母は
彗星よとのたまひにけり

臺所のランプのホヤに水とびて
ひびり破しを今もわすれず

その時にわづか六つのわれのため
分子論をば聞かせたまへり

年成て自然科学に入りたるは
まことに母の感化なりけり

女みな母となれどもわが母に
まされる母はあるべくもなし

母ありてわれ今日の身を得たるゆゑ
母こそわれの命なりけり

この夏は暑さに弱き母なれど
戦場を痛み避暑に行かれず

「我が日本學」發賣禁止になりたれど
ひとこともなく笑たまふのみ

七十に近き身をもてわが本を
二日半にて讀みたまひたり

二日半にて讀みたまふなど世の常の
老し女のできることにや

讀みたまひ尙このわれの至らぬを
さとしたまへる有難きかな

かかる母をわれもつゆゑに有難し
誇となすはあやまちなるや

わが母は病の巢にてありけるを
治さんとして學びし醫學

かひありて母の命を今日までも
のばし得たるを神佛に謝す

荷車を引きつつわれが學びたる
あの貧乏が語り草にぞ

本郷の切通坂に荷の重く
へたばりにける思ひ出もあり

大道の露店にものを賣りしなど
いまはなつかしき思ひ出となる

「今日もまた純益五圓とくかへり
母のよろこぶ顔をみんかな」——二十才作

母を治し世を救はんとしたることが
いつしかわが身をも救ひるたりき

母あらず家を見るべき用なかりせば
われは好める乞食でありけん

あてどなき旅より旅にさすらふは
わが若き日の望みなりけり

名も金も求めぬわれにゆくりなく
二つの來しはまこと夢かも

いと小さく富といふべきほどならず
さりながら母を安んじ得たり

名も金もわれにはいらぬものなれど
母よろこべばわれも悦しき

ようやくにわづかの金を得たる時
まづ母のため家を建てたり

母のつぎに二人の妹に家を建て
われとわが子にまだ家あらず

いささかに人に知らるる身となりて
家なしと云はば誰か信ぜん



いま住むはわがはらからに分ちたる
會社のすみに間借の次第

小さな家にてよろしわが家を
もちたしといふ妻のいとほし

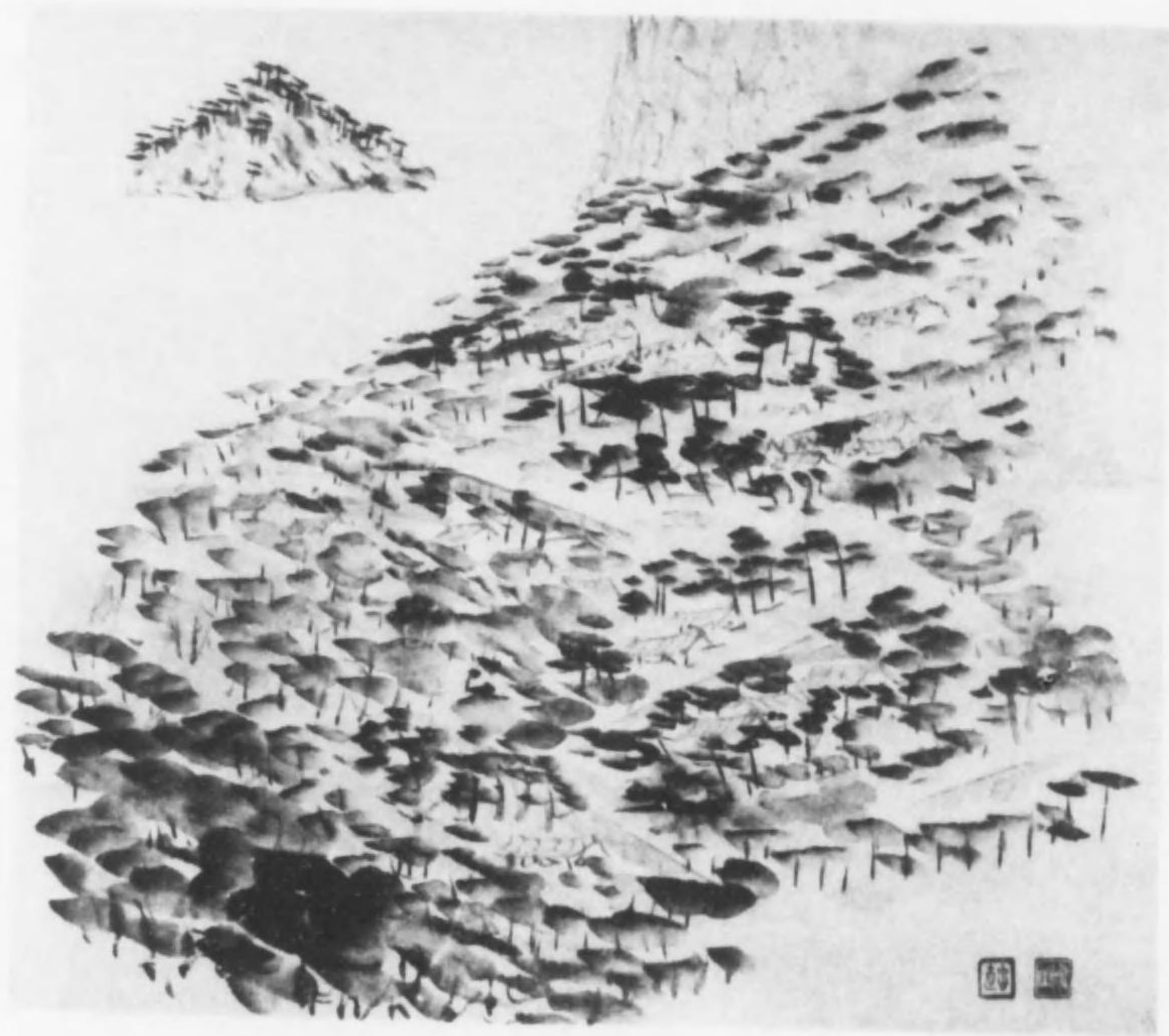
世界をば家とするわれに家いらす
さもあれ妻の歎くも然り

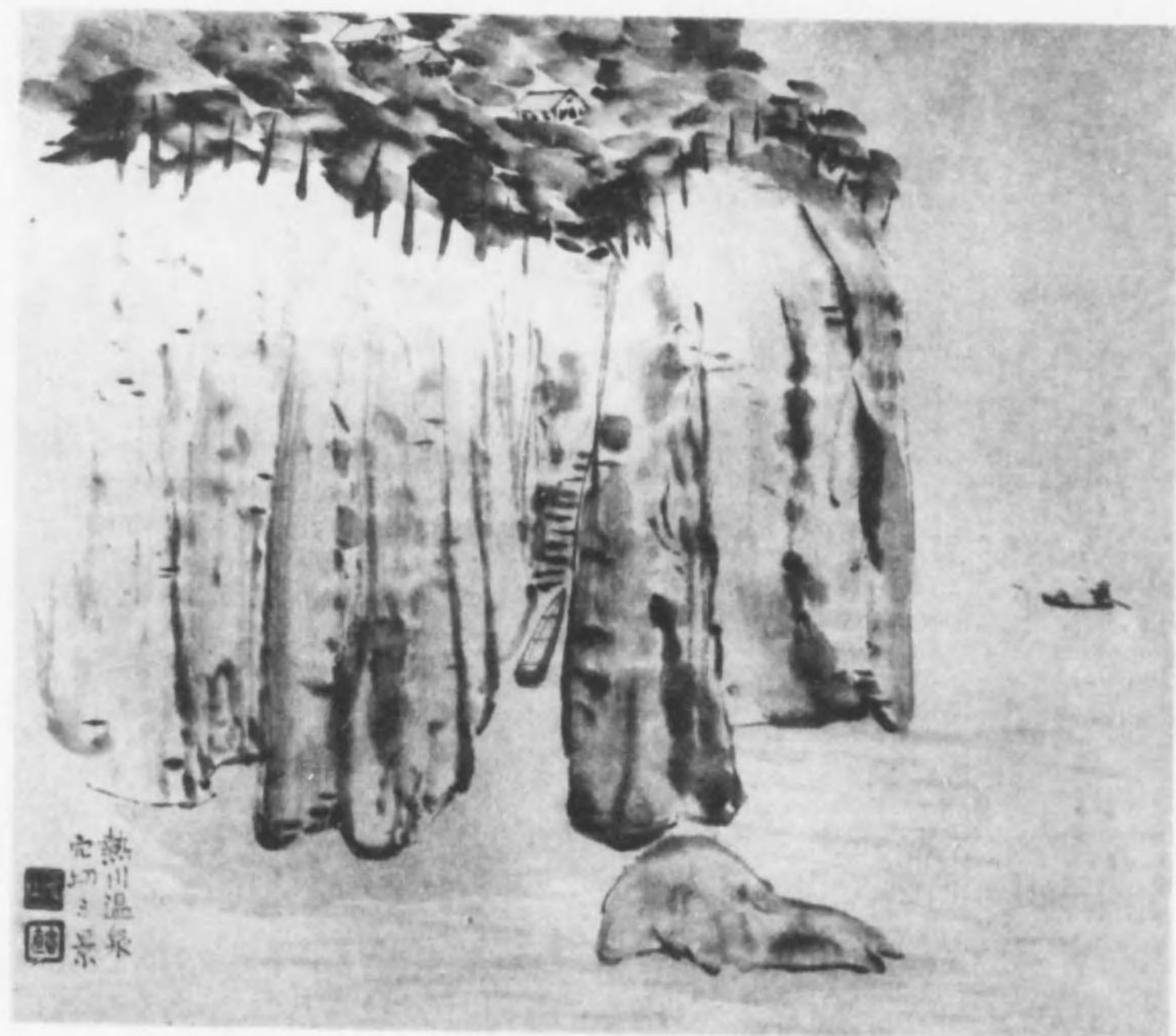
然か歎けば妻の家をと思ひしに
この戦ひに夢はまた消ゆ

五十路に近くいまだ家なししよせんわれ
貧乏性に生れけらしな

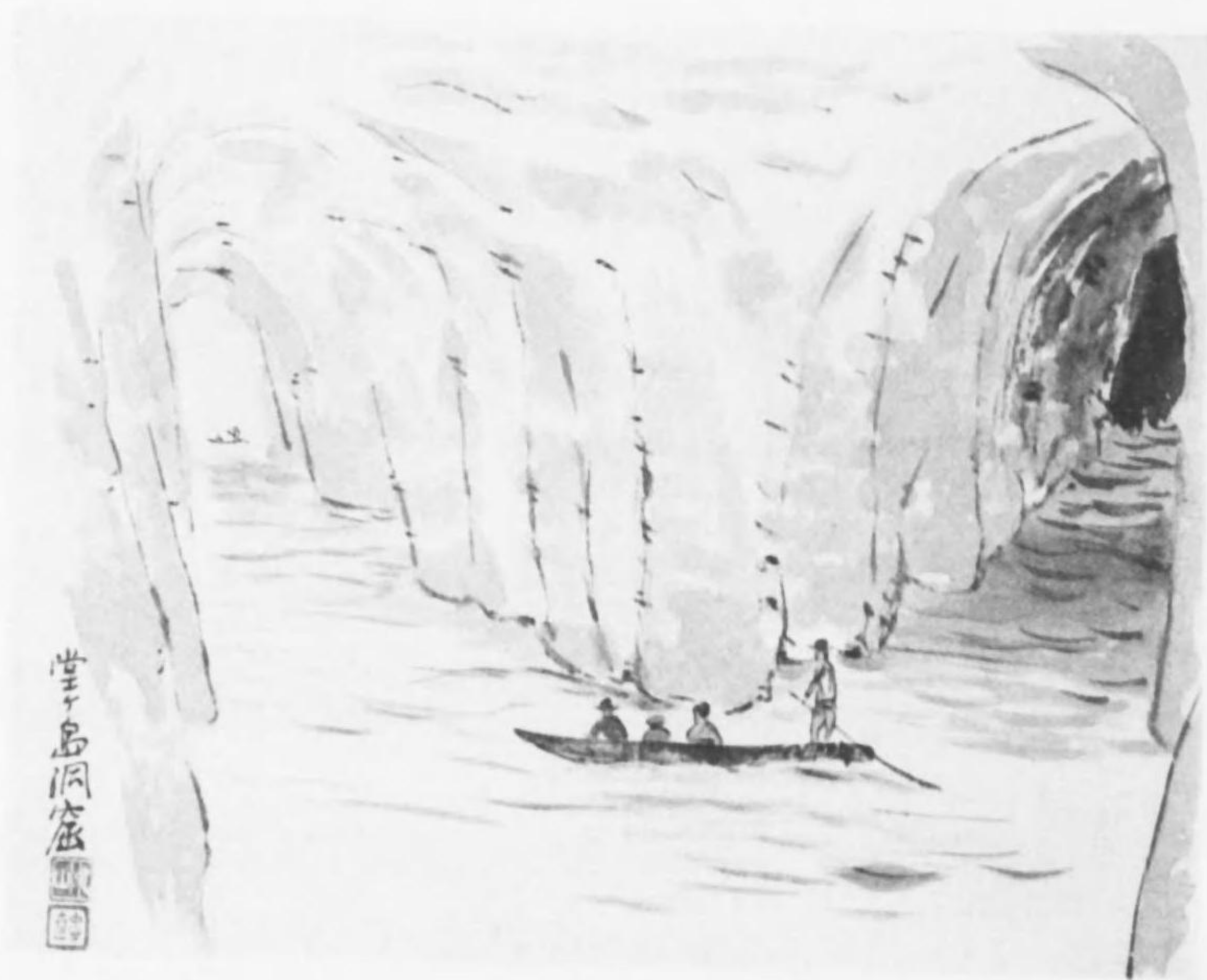


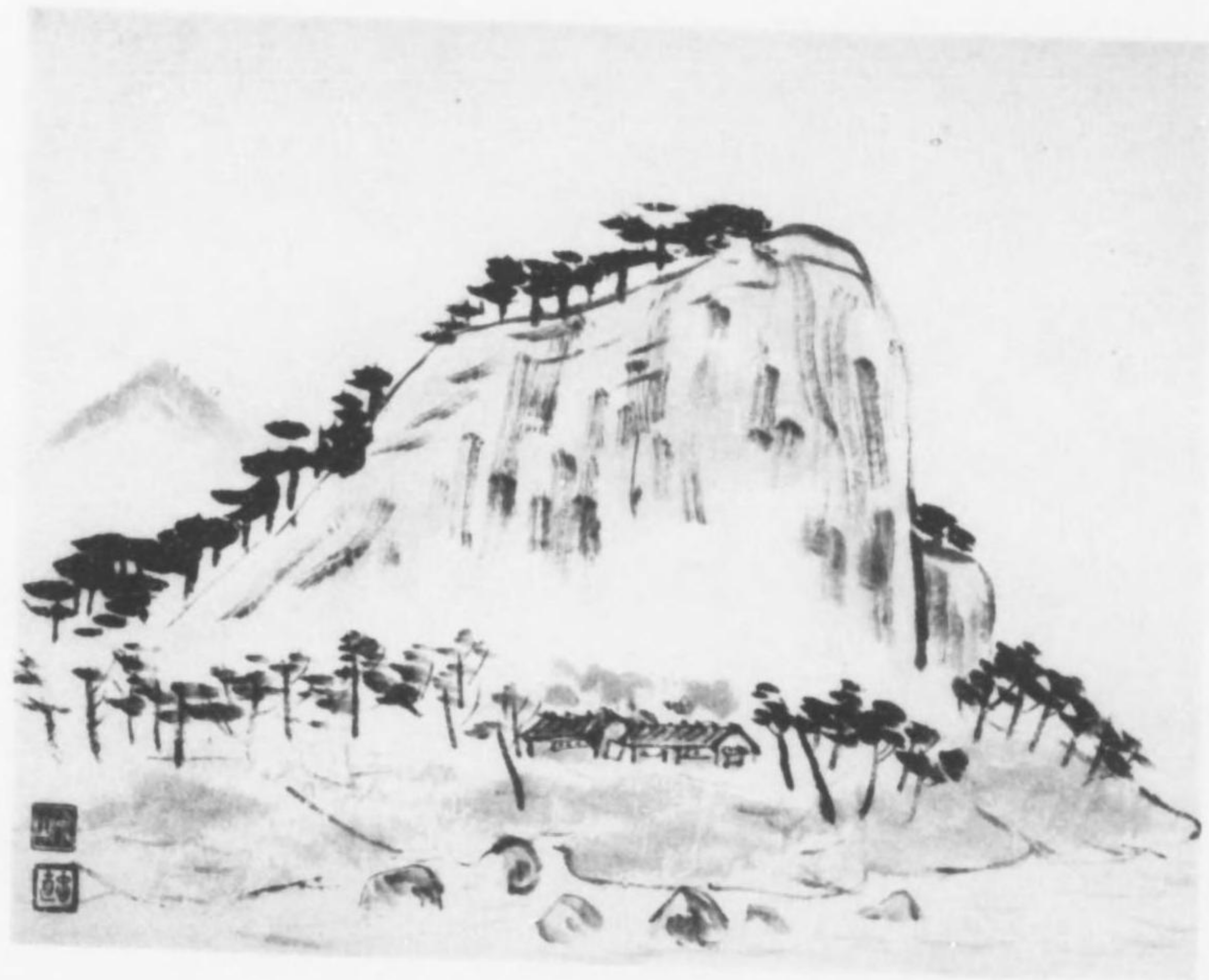












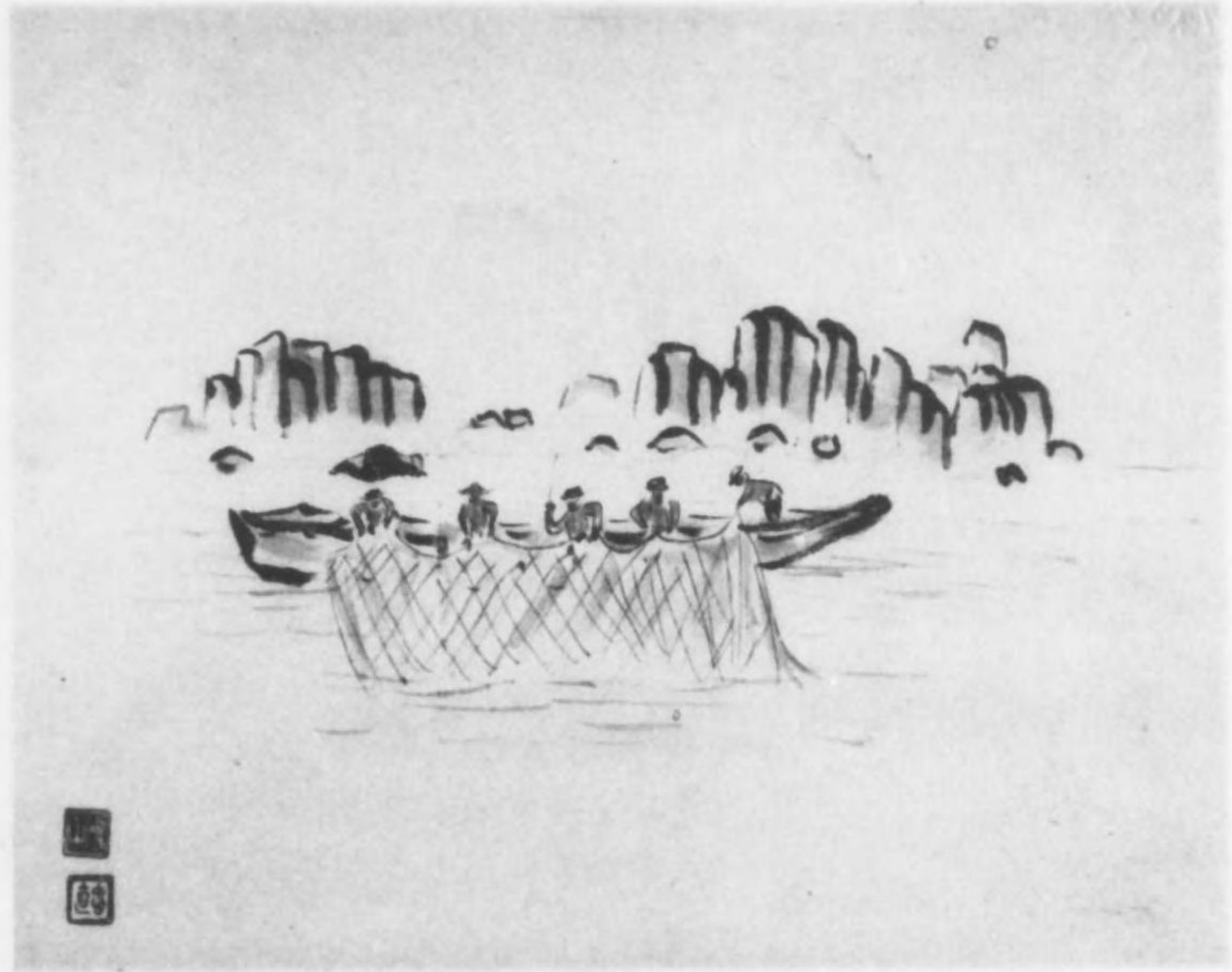
世を棄つる

母の病を治さんとして學びたる
醫學あらはれわれ世に立てり

あたらしき醫學の道を拓ひらきしも
醫師ならでわれは罪されんとす

人のいのち救ふべきことも醫師ならでは
罪とせらるる悲しき極み

日本に生れて國を愛するに
ただこの一つ悲しかりけり



日本を愛するゆへに日本の
醫道の墮ちしを救はんとせり

わが醫說外國までも響けども
生れ日本にいれられもせず

滿洲のみかどはわれの上申もて
良き醫師法を定めたまへど

醫師法と戦ひつづけて十五年
いまはまつたく呆れはてたり

ロシアとの病菌戦にわが智慧の
役立つことを自ら知れど

世のなかにはまこと是非なきものにこそ
國の惱みをちつと見てあり

國民のかくて落ち行くなやみをば
よそに眺めてあるの外なし

醫師法に遠けられてこの度は
日本學を拓かんとせり

然かあるにあちきなきかも血ににじむ
日本學もまた禁止さる

われつひに世には容れらるべくもなし
静けき里に去りて暮さん

さひはひにわが發明の賣藥
これあるありて飢ゆることなし

世を棄つるわれに代りて商ひて
われを食はず直雄(義弟)に謝す

美田をば子孫のために買ひ得ねど
小さき家を妻子に買はんか

このわれに光る空氣と水と芋と
子供のあれば何か求めん

東京は子を育つべき地にあらず
風の光れる田舎に行かん

われもまた子供にかへり子と共に
トンボを追ひて日を送らんか

良寛が子供とともに遊びたる
こころの奥のうなづかれぬる

良寛は世に容れられず世を棄て
歌と子供にかくれたるもの

良寛は子供と歌と書とありぬ
われは子供と歌と繪とあり

良寛の胸に燃ゆるものが胸に
同じく燃えてわれも世を棄つ

富士の嶺はとこしえにして愛すべし
富士の嶺みゆるとこに去らんか

惟念坊は富士を愛して乞食して
富士の麓を去らざりしとか

今われは新しき世の惟念坊
人の門には立たざるまでの

ありがたや商賣よりのあがり金
乞食をなさず繪と畑とあり

假の世に生くるわれには新しき
家などいらじ古家にて足る

沼津には牧水の家あきをれば
それを求めて行き住はんか

家と畑と雨と飢とをしのぎ得ば
妻よそれにて足るにあらずや

然り然りわが行くところどこまでも
つき來るといふ妻のうれしき

牧水の家を求めて

牧水を愛するゆへにその家を
求めて住むはうれしかりけり

「歌の聖の住みたる家」と石にきざみ
後の世にながく傳へんとおもふ

歌の聖の建てたる家に起き臥して
木もれ陽を愛づ笹鳴りを愛づ

池の鯉今日よりわれは主人なり
牧水にかはり餌をあたへむ

木もれ陽の静かなる池よ牧水は
かくして餌をあたへたりけむ

愛鷹の山より移せし山櫻
牧水がめでて移せし櫻

牧水の遺愛の櫻さきにけり
池にうつれる姿とほとし

池の面に散りしく花よ逝く春を
惜みて永く水に浮けかし

わが子等よこの櫻をば切るなかれ
これはこの家のまことの主人

牧水の書齋は藪やぶに包まれて
かくれ住むにはまことよろしき

いにしえの支那の亂れに賢人さかひびとら
藪にかくるとわれもその真似

牧水とつひに會ふ日を得ざりしも
さも悔くあらずこの家に臥ふせば

歌の聖ひたりは奥津城おくつぎのなかにほほえまん
酒と歌をば君にささぐる

この家は牧水の家、床の繪は
如洋の繪なり淋しくはあらず

子等よ見よあれが愛鷹あしたかあれが富士
あれが香貫かぬきよ天城あまぎの山よ

愛鷹にかくれて富士のひろ裾野
すべて見えぬはすこし惜おしけれ

富士の裾野すべて見えねどこの沼津
牧水の家とよき水とあり

家に隣る防風林は南國の
木々をまちえし太たき松原

この濱は田子の浦つづき松多し
行けども行けど松は果はなし

赤人も静御前も通りたる
松原の道は今は寂れぬ

波の音むかしも今もかはらねど
人の世のみはうつろひにけり

松原に坐りてあればさはがしき
いくさのこともみな忘れらる

松風よ蟬よ蜻蛉よ波の音よ
いくさは今はどこにあるやら

香貫山みねより見れば海ぞひは
みな黒黒と松林なり

見おろせば松ばかりなり海ぞひは
げに黒黒と松ばかりなり

香貫山ひくくあれども良き眺め
まへは海原うしろには富士

妻と畑

わが妻は妻といふより戀人よ
日も夜も語りなほ飽かぬかも
心より愛する妻をかち得たる
われとわが身を祝ひことほぐ
土に親み黒く輝く妻の顔
白きにまして尊かりけり
二人して畑に出てかきし汗
ふき合ふときは樂しかりけり

三人もの子供はあれどわれら二人
初戀のごとくつねに樂しき

啼きながら雲雀つがひて落ち來る
——そらまた落ちる面白きかな

空を仰ぎものをもいはす雲雀をば
指させば妻もほほ笑みて答ふ

魂のちかに觸れあふうれしさよ
仕事せわしき都を去りて

面白きは若きうちのみといふは嘘よ
夫妻は老いて味の深けれ

地の愛のひしひしとして感ぜらる
日ごとにそだつ畑のものよ

地のちからありがたきかな今日もまた
胡瓜の花が五つ咲きたり

「來年はアスパラカスを植ゑませう」
「罐詰でない青芽はよいな」

「いんげんも里芋もキャベツも作りましょ」
「よいともお前の好きなものをば」

二十日大根を生で嚼るはうれしいぞ
ほほづきに似たる二十日大根よ

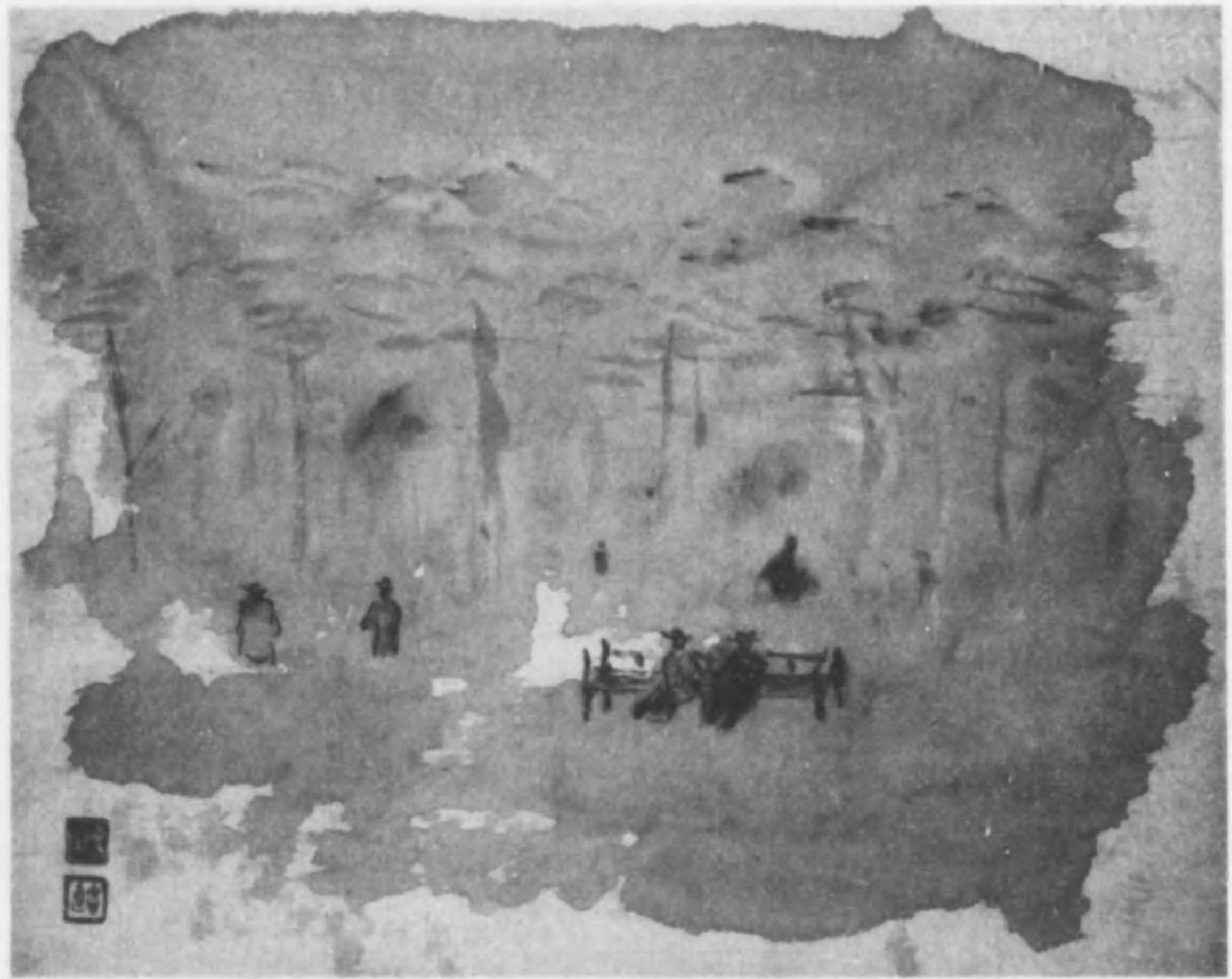
熟る日の遠しと見えしトマトが
午後には眞赤だやあ面白い

豆の花なすびの花よ唐きびよ
花とりどりの花のいでたち

大根よかぶらよ葱よ筍よ
根もとりどりの根の姿かも

朝さ夕な飯のうまさよこの飯も
この菜もみな妻の手になる





孟宗の藪

—— 牧水の家はこの詩に似たところ、妻の希望にて
この詩を添付、大正十一年の作 ——

静けさが冴えわたる夜です
寝てゐると庭の藪から幽かに幽かに
笹すれの音が聞えてきます

その笹すれを聞いてゐると
忘れてゐた古い感情が

しめやかに胸に湧いて來たのです

僕は静かに寢床から起きあがつて
電燈を消して蠟燭の灯をともし
古風な氣持で詩を作り始めました

蠟燭の淡い灯ひにぼうつと照らされ

古い机が暗い陰影を床になげ

額がぼんやり壁に浮き出してゐます

それ等はまことに古めかしい氣持です

しかし僕の心は更にもつと深い深い

淋しさを求めてやみません

僕は戸だなから祖父の手燭を捜し出し

机の蠟燭をそれに移してささげながら

雨戸を開けて庭石におりたのです

庭の奥には孟宗の藪があります

藪の中に灯ひを入れると竹の幹かきが

ぼんやり暗がりに浮いて見えます

僕は灯をとつたまま藪に分け入りました

手燭の灯にぼやされた竹の幹が僕を囲み

その竹の奥を更に深い闇が包んでゐます

上うへを仰ぐと手燭の口から射す光に

竹の篠たけと繁みあふた細い葉が

くつきりと照らし出されてゐます

そして竹の幹に手を掛けてゆすぶると

手燭に照らされた葉がさらさらと

何とも云へぬ音を立てるではありませんか

僕は更に藪の奥に分け入ります

そこは山の麓につづいてゐて

泉がいつも湧いてゐるところです

藪に囲まれた窪に落葉が黒黒と朽ち
その落葉の中から美しい清水が
夜もなほもれあがつて湧いてゐます

そしてその泉が竹の根の間に
細い流れを作つて庭へおりてゆき
築山のやり水になつてゐるのです

おやここに藪柑子^{やぶかんじ}が赤い實をつけてゐるぞ
夜ふけにかうして手燭で照らしてみると
ほんとにしみじみ淋しい實だなあ

——かうしてこの昔ながらの感じに
じつとひたりながら藪のなかを
さまよつてゐるのは何とも云へない氣持です

手燭の灯が盡きるまで僕は
かうして藪をあてどなくさまよひ
竹の幹を叩いたり葉をゆすぶつて見よう

××××××××××××××××××

老生が氏を知つたのは、大正十三年に始まる。氏は『日本藝術の新研究』と題する新稿一篇を持参されて『中央美術』誌上に登載を求められたのであつた。その一篇は頗る獨創の見に富んだもので、鑑賞家研究家を啓發する名文であつたが、操觚者間で進んで發表を扶けるものはなかつたと云ふ。老生は其の價値を認めて、氏の要望に副ひ、數ヶ月に亘つて誌上に連載した。この點に於て老生は、早くも中山氏の敬仰者となつた一人であつたと云へよう。その時分、氏の名は中山啓といふペンネームで、老生はそれを本名であると思つてゐたが、それきり文壇から氏の名前は消え去つた。それから約十年。老生が平福百穂の遺作展覧會を開催した時、ひよつくりと會場に來られ、久淵を叙せられた後「野澤如洋を知つてゐるか」との話「知らぬ」と答へると、早速送つてよこされたのが老大豪華な『如洋畫集』で老生を驚かせた。然も名前が忠直と變り有名な漢方醫であるには驚くより呆れてしまつた。聽て氏を訪ねて、如洋の作品を見て、實に超凡の作家であることを知ると共に、多年美術界に居ながら、斯る畫家の存在を知らなかつた、自分の迂濶さを恥ぢた次第

でもある。如洋が弘く世に知られなかつたのは、名利の外に超然たる、その性格の然らしむる處であつたのであらうが、現代鑑賞家の眼識の水準を、高く抽んでゐた爲でもあらう。それを擱んで世に呈示したと云ふのは、中山氏の鑑賞眼の常凡ならざるを明證するもので、所謂伯樂が千里の駒を見出したものである。

その中山氏が繪を描くと云ふ。老生の興味は油然として湧いた。尤も氏は如洋在世中に繪を描くことはしなかつた。如洋歿後始めて繪筆を持たれ、僅か一年の中に本畫集にあるやうな、びつくりする程な畫境に飛躍された。如洋を發見し如洋を研究してゐる氏は、何時の間にか如洋と異つた新畫境を拓いた。これ等の畫を凝視してゐると、無條件に愉快である。

勿論畫技の上から云へば氏は素人であるから、専門畫家に劣るのは勿論である。然し藝術は感覺であり、自然の掴み方如何によつて、その作品の生命が定まる。氏の繪は甚だ謹嚴なものと、ユーモラスなものと種々あるが、内心の燃燒する現象を直ちに紙面に叩き附ける正直さを以て人を打つ。そしてその表現法は實に勇敢である。この態度は、筆致の練達のみを之れ事とする繪かき達には、容易にやれない藝

かく表現したので、余自身の本心はこんなことでへこたれてゐない。余の筆戦はこれからだと考へる。余の思想は、當分は理解されさうもない。だが幸に余には直接に、全人類に呼びかける方法が開かれた。運命に感謝するの外はない。

昭和十五年四月十日 印刷
昭和十五年四月十五日 發行

「わが繪わが歌」

限定、非賣

著者

東京市牛込區若松町十二番地(本宅)
中山忠直

發行者

東京市澁谷區穩田二丁目二十一番地
皆見健吉

印刷者

東京市神田區錦保町一丁目三十四番地
尾藤光之介

發行所

東京市澁谷區穩田二丁目二十一番地
嵐山莊

振替東京九九八七番

302
283



終